



ほ　う　せ　き　に　わ
なのはと宝石の庭

やまもとふみ／作

か　が　み　や
花芽宮るる／絵

contents

- 1 荒^あれ果^はてた庭^{にわ}
- 2 菜^な乃^の葉^はの失^{しっ}敗^{ぱい}
- 3 イチゴ泥^{どろ}棒^{ぼう}
- 4 二冊^{ふた}のノート
- 5 祖^そ母^ぼの形^{かた}見^み
- 6 過^か保^ほ護^ごな真^ま冬^{ふゆ}

プロローグ

63

53

41

33

26

8

6



もくじ

15	14	13	12	11	10	9	8	7
波乱の幕開け	宝石の庭	手作りの試験紙	勇気を振りしぼって	学校に行けば	埋まっていたのは	ふゆくんの薬箱	弱ったトマト	真冬のターン
181	172	144	128	121	112	94	85	71

Nanoha to houseki no niwa.

「宝石の庭」って…？

葉乃葉の亡くなったおばあちゃんの
家の裏庭。ブルーベリー、木イチゴ、
ブドウ、リンゴ……この庭に実ってい
るものは、ぜんぶ「食べられる宝石」
だと、おばあちゃんが昔言っていた。
ここで、真冬はおばあちゃんからたく
さんのことを教えてもらったみたい。

なのはと宝石の庭

登場人物

Nanoha to houseki no niwa.



あおい まふゆ
蒼井 真冬

ちょっぴりイジワルだけど、過保護。
葉乃葉のおばあちゃんと仲がよかった。



はむら なのは
羽村 菜乃葉

ワケあって不登校の中1女子。本が好き。
父親と二人でくらしている。



とう
お父さん

大学の先生。
葉乃葉のお母さんとは別居中。



たかはし
高橋くん

真冬の幼なじみ。



はやし せん せい
林先生

葉乃葉と真冬の中学校の
理科の先生。



なにより目^めを
引^ひいたのは――



ほうせき
宝石
みたいな、

まばゆい
かがや
輝きを持^もつ瞳^{ひとみ}。



ふわり、と風が吹いた。

キラキラと光の粒が舞い上がる。

風がざわめく音がして、草木がゆれ、わたしは目を細めた。

そこに、いた。

すつとのびた背丈。長い手足。光を浴び、金色にも見える淡い色の髪。

透き通るような肌。向こう側では、陽の光がゆらめいている。

そして、なにより目を引いたのは――。

宝石みたいな、まばゆい輝きを持つ瞳。

……人間じゃない。

そう思った瞬間、わたしの体がかたまった。

だって、まるで大好きなファンタジー小説に出てくる妖精が、そのまま現れたみた

いだったから。

心臓が、どくん、とはねる。

「え……妖精？」

気がついたら、声がこぼれていた。

すると、彼は目を見開いて、びつくりしたような顔をした。

まっげがゆつくりと瞬き、まるで時間が止まったみたいに静かになる。

わたしは思わず息をのんで……次の瞬間、彼はぶつと吹き出した。

とたん、

ぱんっ！

まわりの空気がまるでシャボン玉のようにはじける。

「妖精、つて。」

からかうような彼の笑い声が耳に届いて、わたしはあまりの恥ずかしさにまっ赤になった。

今思うと。

この出会いが、灰色だったわたしの世界にぽつりと落ちた、最初の色だったんだ。



1 荒れ果てた庭

縁側の外にはあざやかな青空が広がっていた。

五月晴れて言うんだよね、こういうの。

世間はゴールデンウィークが明けたばかりだ。

って、年中休日である、わたしにはまったく関係ない話だけど！

「……なあんて、ね。」

ため息を一つつくと、わたし、羽村菜乃葉十二歳、はゴロン、と広々とした座敷に転

がった。

座敷にはお仏壇が置いてあり、ちよつとお線香のにおいが残っている。

今どきお仏壇？ お線香？ って思った？

でもこの家が建てられたのは昭和三十年だから普通のこと。

わたしのおばあちゃんが生まれた年のことだつて聞いて、びっくりした。

わたしは訳あつて、お父さんとふたりで、去年亡くなつたおばあちゃん——お父さんのお母さんの家に住んでゐるんだ。

ひまだなあ……。

わたしは起き上がると、本棚に目を向ける。

かべ一面を埋めつくす本棚の一番上の段には、勉強の参考書や、お母さんが選んだためになりそうな本がならんでゐる。

けれど、それらはほとんど開かれることなくホコリをかぶつてゐる。

その下には、ここに引越してくるとき、どうしても置いてこれなかつたわたしの本がぎゅうぎゅうにつめられてゐる。

まず、こども向けの図鑑がズラリ。

動物、植物、昆虫、宇宙に恐竜。何度も読んだせいで、ところどころ破れていて、よれよれだ。

ほかは主に冒険小説やファンタジー小説だ。

一冊、お気に入りの海外のファンタジー小説を手にとる。

そしていつものように、本の中の世界に入りこもうとした。

だけど、

カチリ。

古い時計が八時半をさしたとたん、わたしが本の中に入るのをじやまするかのように、洗濯機がピーと、洗濯終了の合図を出した。

「あーめんどくさ……。」

と言いながらも、しぶしぶ本を置く。

お父さんは今日、お仕事で朝早くからいない。

だから、家のことはぜんぶわたしがやることになっていた。

カゴに入れた洗濯物を抱えて、縁側から庭に出る。

すぐそばにある物干しに洗濯物を干し終えたと、目の前にあつた青々とした緑が目に入

る。

若葉わかばをたくわえた小ぶりなサクラの木きには、ぶるんとした緑みどりの実みがなっている。
たしか、このサクラの実みつて、食たべられるんじゃないかな。

サクラはサクラでも、サクランボの木きつてこと。

昔むかし、おばあちゃんが言いつてたような気がする。

『六月がつになったら遊びあそびにおいで。たくさん食たべられるからね。』

つて。

お正月しょうがつやお盆ぼん休やすみにおばあちゃんの家いえに遊びあそびに来きたのは、ずいぶんと昔むかしのことだ。
お母かあさんとおばあちゃんが仲なかが悪わるかったんだよね。

だから、用事ようじがないと来こなかつたし、来きたとしてもすぐに帰かえつちやつて。

それで、結局けつぎ、サクランボを食たべたことは一度いちどもなかつたんだ。

……食たべたかつたなあ。

つて、もしかして、今年ことしは食たべられるのかな？

なんとなくワクワクしていると、ふと、サクラの根元ねもとに飛とび石いしがあるのが見みえた。

飛び石は、家の裏に続いている。

「え？　こんなの気づかなかった……。」

いつもは茂った草に隠れてしまつてゐるせいで、目に入らなかつた。

それに、門と家のあいだには、サクラやウメなどが植えられた、けっこうしつかりと広い庭がある。だから庭はここだけだつて思いこんでいた。

だけど、引越してきたときに家の塀のまわりをぐるりと回つたら、一周するのに二分くらいかかったことを思い出す。

よく考えると、家に対してずいぶんと土地が広い気がする。

つてことは、裏も、うちの庭つてこと？

塀と家の狭い隙間を、地面に敷かれた飛び石に導かれるように歩いていくと、バラにおわれた緑色のアーチにたどりついた。

茂りに茂った葉っぱのせいで、アーチの向こうにあるものは見えない。

あれ？

「なんか、ここ、来たことがある、気がする。」

緑のアーチをくぐり抜けると、ざっと風が吹いてわたしはぎゅっと目を閉じる。

鳥が羽ばたく音がする。

水を含んだ濃厚な空気が体を包みこむ。

そつとまぶたを上げたわたしは、思わず目を見開いた。

だって。

そこにはあざやかな色があふれていたから。

樹木には、色とりどりの大量の果実がなっていて、陽の光にキラキラと輝いている。



すぐそばの木には、小さな赤紫色の粒が、かたまりになっている。

見たとたん、甘酸っぱい味が口の中に広がってびっくりする。

「えっ、これ……木イチゴ？」

思わずふれる。

この木イチゴはたしかマルベリーとも言うんだって。

図鑑で見たからおぼえている。

さらに足元には赤い粒がたくさん。

野イチゴ——ワイルドストロベリーだ。

えっ、なに、ここ。

すごい。

塀の中ではあるみたいだし、うちの庭……だよね？

一歩、一歩、飛び石に誘われるように足を進める。

庭はものすごく広く、家が建っている場所の二倍くらいの面積がありそうだった。

だけど、進むにつれ、最初の感動が薄れてきた。

雑草ざっそうにおおいつくされた庭にわは、なにが植うえられているかわからない。
荒あれ果はてている、と言いつていいものだったから。

「ここつて、もつときれいじゃなかった？」

あと、もう少し広ひろかったような……つぶやいてハツとした。

ああ、わたし、おぼえているんだ。

この庭にわのあるべき姿すがたを。

だからがつかりしたんだ、つて自覚じかくしたとたん、急に頭あたまの中に記憶きおくが広ひろがった。

それは、昔むかし一度どだけ、お母かあさんの目めを盗ぬすんで、この庭にわに入りこんだときのものだった。

かつてのこの庭にわには、足の踏ふみ場ばがないくらいに、たくさん野菜やさいが植うえられていた。
八百屋やおやさんで売うられてるような野菜やさいが、ずらりとならんでいて、幼おないわたしは、

「これ知しってる！ トマトでしょ、キュウリでしょ！ それから、これは——。」

と大興奮だいこうふん。

おばあちゃんは、

「なのはは植物博士だねえ。」

とうれしそう。

どこからか流れてくる甘い香りに目を細めたわたしは、次に視界に飛びこんできたあざやかな色にハツとした。

見上げると、頭の上の枝にたわわに実るのは色とりどりの果実だった。

熟している実もあれば、まだ青い実もある。

よく見ると、花が咲いている木も、葉っぱだけの木もあって、さまざまな果樹が入りまじっていた。

「これはブルーベリー。それから木イチゴ。ナシにブドウ。秋になったら、リンゴやカキ、ミカン、キウイフルーツ、もつとたくさんの実になるよ。」

おばあちゃんが指さしながら教えてくれる。

こんもりとしたブルーベリーは、つんでもつんでも採りきれないくらいになっ
ていて、つみたてのブルーベリーの味は、甘かったり酸っぱかったりで、すぐく濃い味がした。
「おばあちゃん。ここ、宝石箱、みたい。」

わたしはうつとりとつぶやいた。

そこはまさに、宝石の庭だった。

すると、おばあちゃんはうれしそうに笑った。

「だとしたら、ここに実っているものは、ぜんぶ、食べられる宝石だねえ。」

すっかり忘れていたことにおどろいた。

口の中には思い出の味が広がったけれど、今、ブルーベリーの木は一本だけになっていて、しかも花はまばら。なんとなく元気がなかった。

しょんぼりしつつ、見回す。

月桂樹やユーカリなど、昔と同じままそこにあるものもある。

けれど、ピカピカのトマトやキュウリなど、たくさんの野菜や果物が植えてあった広い畑には、草がぼうぼうと生い茂っていた。

「シロツメクサ、タンポポ、ヒメジョオン……。」

どれもすごく強い植物で、一般的には雑草って言われる。

その隙間^{すきま}をぬうようにして茂^{しげ}っているハーブもあった。

「あ、すごい。ローズマリーにアップルミントだ。」

ローズマリーは香り^{かお}がよくて、お肉料理^{にくりょうり}とかに使う^{つか}けっこう有名なハーブだ。

そしてアップルミントはミントの一種^{いっしゆ}。すーつとしたい香り^{かお}がするんだ。

どちらも強い^{つよ}から枯^かれなかつたのかも？

見^みおぼえのある植物^{しよくぶつ}の名^なをつぶやきながら歩^{ある}いていると、どんどん記憶^{きおく}がよみがえってきた。

ああそうだ。

そうだった。

わたし、ここの庭^{にわ}を見^みたから、植物^{しよくぶつ}が好^すきになつたんだった。

あの日^ひ、あまりにきれいで、これはなに？ これはなに？ って、おばあちゃんにたず

ねていたんだ。

そんな知^しりたがりのわたしに、おばあちゃんは、うれしそうにいろんなことを教^{おし}えてくれた。

花の名前や、木の実の育ち方、葉っぱのにおいまで——ぜんぶ、楽しそうに。

だからわたしも、いつのまにか、いろんな植物のことをおぼえてしまったんだ。

そしてその後の誕生日におばあちゃんからもらった植物図鑑を、わたしはずっと宝物にして、くり返し読んでいる。

お母さんには、「そんなムダなことより、受験に役立つ勉強をしなさい！」つていやがられてたけど。

あれだけはどうしてもやめられなかったな。

意外な原点にたどりついて、びっくりしていると、飛び石が終わる場所だった。

ふと見ると、そこにも広い畑があった。

ん？　なんでここだけ雑草がないの？

黒々とした土が見えて、わたしはびっくりした。

どう見ても、たがやされている。

たがやされているどころか、そこには苗が植えてあったのだ。

「え、お父さんがやったのかな。」

一瞬いつしゆんそう思おもったけれど、すぐにちがうと思おもった。

だつてお父とうさんはお仕事しごとがいそがしくて、朝あさは早はやいし、夜よるも遅おそい。こんなことをする時じ間かん、ないはず。

「トマトの苗なえ？ あとキュウリとイチゴとシソとサツマイモ、それにカボチャも???」

植うえてあるものの名なを思おもわず口くちに出だすと、

「なんで、見みただけでなんの植しょくぶつ物ぶつかってわかる？」

ふと声こえがして、わたしは声こえのほうへふり返かえる。

奥おくの塀へいに設もうけられてゐる裏口うらぐちから現あらわれた人影ひとかげを見みて、わたしはかたまつた。

すつとのびた背丈せたけ。

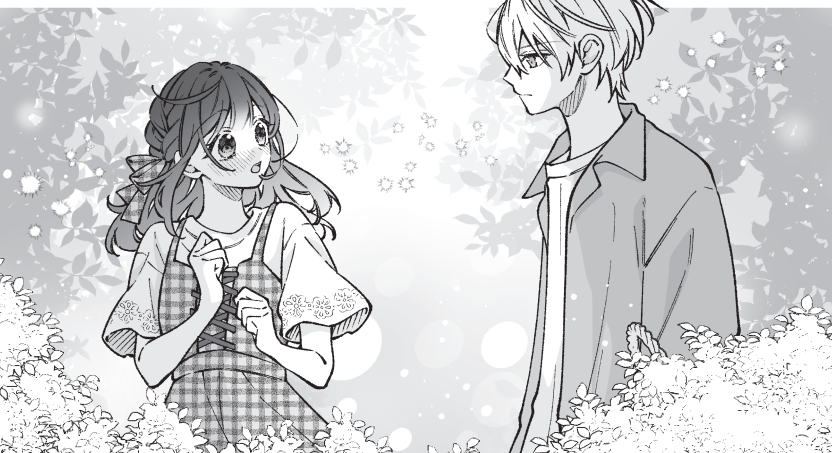
長ながい手足てあし。

色素しきその薄うすい、サラサラの髪かみと整ととのつた顔立かおだち。

中なかでも目めを引ひくのは、宝石ほうせきみたいなまばゆい輝かがやきを持もつた瞳ひとみ。

ふと頭あたまの中なかに、さつき手てに取とつたファンタジー小説しやうせつが浮うかんだ。おぼえるくらいに何度なんど

も見た透とう明めい感かんのある水みずの妖精ようせいの挿絵さしえと、その子こが重かさなつて見みえた。



「え……妖精？」

わたしがつぶやくと、妖精は目を見開く。

かと思うと、ぶつと吹き出した。

「妖精、つて。」

とたんにまわりの空気が、ぱんつとまるでシャボン玉のようににはじけ、わたしは目を瞬かせた。

我に返ったわたしは気づいた。

そこにいたのは、どう見ても、人間の男の子だ。

しかも、わたしと同じくらいの歳の。

「……………」

ブワツと顔に血が集まるのがわかった。

わああああ、わたしのバカ!!!

いるわけないじゃん、現実に妖精なんて!!!

男の子はくつくつと笑いながら、肩をふるわせている。

かと思うと、彼は裏口のすぐそばの木になっていた黒い実をつみ取った。
さつきと同じマルベリーでも、こちらは熟したマルベリーだ。

え？

目を瞬かせたわたしの前で、彼はぱくん、と実を口に入れ、「まだ、ちょっと早いかな。」とつぶやいた。

は？？？

男の子は今度は野イチゴをつみ取ると、手に持っていたカゴに入れていく。
そ、そういえば。

ここが、うちの庭で、妖精でないならば。

この『人』はよく考えると立派な不法侵入者で。

つてことは。

現状をじわじわと理解したわたしは、今度は頭から血の気が引いていく気がした。
きつと顔はまっ青だ。

「ど、どろぼ——！」

思おもわずさけぼうとしたら、男おとこの子がギョツと目めをむき、わたしに飛とびついて口くちをふさいだ。

大おおきな手てがわたしの口くちをおおう。

ぎゃ、ぎゃああああ!?!?

「ちがう。つていうか、ここはおれの庭にわなんだけど。」

おれの?

そんなわけないじゃん!

と思おもったけど、口くちをふさがれているから言いえない。

つていうか、この子こすごい力ちからなんだけど——これつて、かなり、やばくない!?

も、もしかして犯はん罪ざいに巻まきこまれかけてる!?

恐怖きょうふで体からだがかたまると、男おとこの子こは、

「あ。ごめん!」

と、あわてたようにわたしを離はなした。

わたしがあらためて悲鳴ひめいを上げようとすると。

彼は口元に指を立てて「しー！」と制する。

いや、しー！　じゃないし！

と思つて口を開けると、男の子はわたしの口に野イチゴを放りこんだ。
ぶわっと広がる甘酸っぱい果汁に、わたしは思わず目を見開く。

甘い！　おいしい！

——　じゃなくって！

男の子はそんなわたしの目をじつと見つめる。

あまりにきれいな目。

見惚れたわたしは、言葉を失う。

そんなわたしに、彼は、ゆつくりとたずねた。

「あんたさ、中学生だろ。——　どうしてこんな、平日の昼間にここにいる？」